

社会の仕組み・社会への関わり方を問い続ける子どもを育てる社会科授業づくり - 自分たちの意思決定に対する批判的・省察的な思考に着目して -

社会科学研究部

1 問題の所在

本校では、「〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成」を研究主題に設定し研究を推進してきた。〈他者〉とは、必ずしも自分以外の人を指すのではなく、自分の認識の外側にある「異質な対象」と規定している。一つ社会科の例を挙げたい。わたしたちの身の回りには便利な工業製品がたくさんある。日常生活を通じて私たちはそのような認識を形成している。しかし、私たちはしばしば、その奥に潜む事柄や事実から目を背けてしまう。例えば、その製品はどんな過程を通じて店舗に並ぶのか、どんな工夫や努力のもと出来上がったのか、等。このように、自分の認識の外部にあるものが、〈他者〉である。そんな〈他者〉と出合い向き合うことは、とても苦痛で精神的な負担を要する。それでも、出合い向き合うことを肯定的に捉え、時には自分の認識や価値観を更新しようとする子どもを育てることを本研究は目指している。本稿では、これに対する社会科のアプローチとして、「社会の仕組み・社会への関わり方を問い続ける子ども」像を設定し、授業のあり方について検討したい。

2 社会の仕組み・社会への関わり方を問い続けるということ

もう一つ事例を取り上げたい。例えば、第四学年「廃棄物の処理」の学習では、しばしば埋立施設の使用限度の問題や焼却処分による二酸化炭素の放出などの問題を取り上げる。そして、多くの場合、単元の終末で「わたしたちにできることは何でしょうか」と問い、子どもたちは「リサイクルした方がいい」「生ごみの水をしっかり絞ろうと思う」などと意見を述べる。このような児童の姿は、社会問題に対する自分の考えを形成する姿として大いに評価できる。一方で、次のようにも言えないか。生活経験から得ている社会一般的な通念を再確認したり、同調したりするだけになってはいないか。また、有識者の考えを鵜呑みにしているだけにはなっていないか。社会問題やその解決策について安易に捉えてしまっている児童の姿が垣間見える。小西(2017)は、これについて次のように述べている。

仮に万民が「自他の人格を互いに尊重し合い」「社会的義務や責任を果たそう」としたところで、それで平和で民主的な国家・社会が実現するわけではない。なぜなら、社会の動向は個人の願いの単純な総和ではないからである。われわれが住む社会にはさまざまな不都合が存在する。近隣におけるごみ問題から地球規模の環境汚染問題まで、内容もレベルもさまざまであるが、それらは、個人の努力や心がけで解決できるものではない。それが不要というわけではないが、それのみでは解決できないことの方がはるかに多い。(小西正雄(2017)『『公的資質』の試論的再定義—その構造の描出を手がかりに—』『社会認識教育学研究』社会認識教育学会,32,1-7)

このように、社会問題やその解決策について子どもはしばしば安易に捉え、意思決定をしてしまいがちである。そこで、社会科授業・カリキュラムの課題として次の三点に着目し、授業を構想することとした。

- ① 正解を求めさせてしまう社会科授業・カリキュラム
- ② 一つの答えをもって閉じる社会科授業・カリキュラム
- ③ 聞きやすい(受け入れやすい)・見えやすい・解決の見通しが立ちやすい立場・視点を取り上げた社会科授業・カリキュラム

そして、これらの課題を解決するためには、自分たちの意思決定に対する批判的・省察的な思考場面を位置づけることが重要だと考え、授業を構想・実践した。

3 自分たちの意思決定に対して批判的・省察的に向き合わせる指導の手立て

(1) 論争問題を取り上げること

「分かるようで分からない」「～だけど、～じゃない」「Aさんの意見との違いは何?」「どうして意見が異なるの?」という状況を生み出す

(2) 子どもにとって見えづらい立場や視点を取り上げること

自分にとって「受け入れやすい」「見えやすい」枠組みではなく、認識内部にはほとんどなかった視点を取り上げることで、意思決定を見つめ直す。

(3) 意思決定の正当性を問う発問

「どうなることがよい、とわたしたちは考えたか」等の発問から自分の意思決定についてメタ的に見つめ直す。

(4) メタ認知を促す「振り返り」の指導と評価

「どんな見方・考え方で解決したか、意思決定したか」について振り返り、自分の「社会の見方・考え方」の自覚化を図る。

(文責 野元 祥太郎)